

〔原 著〕

親面接をめぐる諸問題

弘中 正美

要 約

子どもの心理療法には、必然的に親面接が伴われる。さまざまなタイプの親があり、親面接の目的は親のタイプによって異なってくる。本論文で検討される親面接をめぐる諸問題は、次のようなものである。(1) 親は子どもの問題の原因として追及されるべきではない。(2) 親は協力者としてさまざまなレベルの潜在的能力を持っている。(3) 親が子どものために何かできることを見つけることは重要である。(4) 親面接は子どもの遊戯療法を外的な介入から守ることができる。(5) 親面接において、遊戯療法の効果を説明することは重要である。(6) 子どもの問題は子どもと親を含む事例全体の抱える問題の安全弁として機能しうる。

キーワード：親面接、協力者としての機能、遊戯療法を守る機能

1. 来談タイプの心理面接における親面接

心理面接において親面接というのは、子どもの問題を主訴とする事例への援助的関わりのひとつとして、臨床心理学の専門性に基づいて親に対して行われる面接のことを言う。子どもの状況や年齢などによって、子ども自身は面接の場に現れず、親だけが面接を受けにやってくることもある。その場合でも、もともとの主訴が子どもの抱える問題に関与するときには、一般に親面接と称することができる。しかしながら、親面接のありようは、個々の事例によって実にさまざまであり、一口に親面接という呼び方が適切かどうかとも疑わしくなるほどである。

本論では、親面接の目的および関連する諸問題について検討することを通じて、親面接をめぐる

臨床心理学的援助のあり方について考えてみたい。

ところで、本論で親面接という場合、親がセラピスト（本論では、子どもに対する遊戯療法の担当者を意味する）ないしはカウンセラー（本論では、親に対する心理面接の担当者を意味する）などの援助者のもとを訪れて面接を受ける来談タイプのものを指す。このようなスタイルは、臨床心理学の実践において標準的なものとして発展してきたが、来談タイプでは、何よりも親が子どもの問題解決のためにカウンセラー／セラピストのもとへ通ってくるという構造上の大きな特徴を持っている。このことはさまざまな意味で、親面接のありようを決定する最重要の要件となっている。また、筆者自身がこれまでほぼ一貫して来談タイプの心理面接を行ってきたこともあり、本論では来談タ

イブの心理面接を前提として、親面接の問題を検討することにした。

なお、筆者（1997、2003、2004）はこれまでに、親面接の問題について何度か述べる機会を持ったが、本論においては、親面接が何を目的として行われるべきかということに焦点を当てて考えたい。最初に整理すると、親面接の目的の観点からは、およそ次のような問題を挙げることができよう。

①親が子どもの問題解決の協力者となるようにすること、この範疇には、②親に情報提供をしてもらう、③親を通じて環境調整を行う、④親に共同治療者となってもらう等が含まれる。そして、⑤親をサポートすること、この範疇に、⑥子どもの変化を親が理解し、子どもに適切に対応できるように親を援助する、⑦子どもの問題発生に伴う親の混乱状態を鎮め、親の持つ潜在的な力が発揮できるようにする、⑧親の来談意欲を維持・向上させる等が含まれる。また、⑨子どもの遊戯療法の場を外部の干渉から守ること、⑩親に遊戯療法に関する理解をしてもらうこと等がある。当然ながら、⑪親自身の問題を扱うことも親面接の目的に含まれる。

ただし、これらは相互に関連した問題であるので、ひとつひとつについて独立に述べるのではなく、親面接をめぐる諸テーマの検討の中に組み込む形で論じていくことにしたい。

2. 協力者としての親との面接

親面接におけるもっとも標準的な目的は、親が子どもの問題の解決に向けて何らかの意味での協力者となることであろう。しかしながら、親は易々

と協力者になれるわけではない。そこには、考えるべきさまざまな問題がある。

①親を「犯人」として追及することの問題性

親面接について最初に考えるべきことは、「親を子どもの問題の原因・犯人とみなすことを慎む」ということである。

ときどきこれとは逆の事態が生じ、親面接を困難に陥れる。すなわち、親は自分が子どもの問題の原因・犯人であるということを暗にあるいはストレートに、カウンセラーから指摘されて傷つくことを経験する。この事態は、親をカウンセリングに対する不信へと駆り立てる。親が過去に他の相談機関を訪れたことのある事例について、親面接者がときに直面するのは、こうした親の傷つきとそれに基づく親面接の困難さである。このような場合には、親の傷つきを理解し、面接に対する親の不信感、不快感、警戒心を解いてもらうことを親面接の最初の目標としなければならないであろう。

子どもの問題を因果論的に捉える傾向の強いカウンセラーは、ややもすると親が子どもに与える影響を重視しがちである。確かに子どもの問題に、親は何らかの形で関与しているといってもよいであろう。しかし、それをどのようなパースペクティブで捉え、扱うかは、かなり複雑で広い可能性をもった問題である。親が子どもに与える影響を直截に子どもの問題の原因として捉えてしまうことは、ある種の偏見を持ちながら親の責任を追及する姿勢にもなりかねない。

また、親の側にはたとえ漠然とした形であれ、自分の育て方の何かが子どもの問題に関わっているのではないかという思いがあることが少なくない。その思いがカウンセラーの原因探しの姿勢と

同調(シンクロナイズ)するときには、親の責任をめぐって、(親:「あのとき、私が子どもの気持ちを考えてあげなかったことが悪かったのでしょうか?」カウンセラー:「そんな傷つきの体験がいくつも重なり合って、お子さんの中に頑ななものを作り出したのかもしれないね」といった風に)親とカウンセラーの間に奇妙な依存と支配の関係が生じることにもなる。こうした事態は、親が主体性を持った真の協力者として動くこととはきわめて異なる結果を引き起こすであろう。

親は親なりに必死に生きてきた辛い過去を持っていることがある。親の抱える問題が結果的に子どもの問題に影を落としているとしても、そのことをもって親が子どもの問題の原因・犯人とする構えは、余りにも親の生き様を理解しようとしないうことである。また、子育てそのものについても、親は親なりにそうとうの努力を払ってきたのである。まずは親の苦労や努力、そしてややもすると陥りがちな不安全感・徒労感・無力感に対してじゅうぶんな理解と労わりを込めた関心を向けるべきであろう。そのように親をサポートに受け止める姿勢によってこそ、はじめて親は子どもの問題解決に向けて望みと気力を持つことが可能となる。親が真の協力者となるのは、その先のことなのである。

②協力者としての親のさまざまなレベル

親を子どもの問題解決についての何らかの意味での協力者と考えるとき、実にさまざまなレベルの親がいる。

一般的には、子どもの日常生活における状況や、子どもの問題と関連があるかもしれない過去や現在の出来事、人間関係などについて、情報を提供してくれることが協力者としての親の典型的な姿

であろう。子どもは自分の状態について言葉で説明することが苦手である。セラピストは、子どもの遊戯療法を通じて、子どもが内的に抱えている状態について色々と推測を巡らすだけでなく、それと対応しているであろう外的な事実について、ある程度知っておく必要がある。

しかし、協力者としての親の役割は、単なる情報提供者に止まるものではない。多くの親は、さらに積極的に子どもの問題解決に役割を果たそうとする。日常生活におけるさまざまな工夫をしたり、これまでの子どもとの関係のあり方を考え直したりする。いわゆる環境調整と呼ばれるものである。子どもは親や家族・家庭に依存した生活を送っているので、親子・家族を中心とした日常の人間関係が適切な方向に変化することは、問題の解決にとってきわめて必要かつ有効である。

また、子どもが遊戯療法を受けるときには、それに伴ってさまざまな新たな事態が生じる。よい変化もあるし、一時的には困った状況も生じる。そうした事態を親が理解して適切な対応をすると、子どもは安心して自分の問題に取り組むことが可能になるのである。遊戯療法によって子どもの中で湧き出し、動き出したものが無駄に溢れて流れてしまわないように、親が“受け皿”の役割を果たすのである。たとえば、遊戯療法の展開に伴って心理的な退行を引き起こした子どもの状態を親が理解し、子どもの甘えや要求を容認して、それをじゅうぶんに充たす関わりを行うといった場合である。ときには、年齢を度外視して、子どもに添い寝をするなど、子どもの心理的退行を受け止めることが必要となることもある。こうした状況が生じたとき、多くの親は最初、困惑する。しかし、子どもが何を必要としているかを理解できる

と、親は覚悟を決めて子どもが必要としている親の関わりを取ろうとするものである。親面接の役割は、子どもの変化をどのように理解すればよいのかに戸惑う親をしっかりとサポートすることにある。

このように、親が子どもの問題解決に必要なさまざまな働きかけを積極的に行う力を持っている場合には、カウンセラーは親の潜在的な力が効果的に発揮されるように心を砕く。親の持つ力が引き出され、カウンセラー／セラピスト側の取り組みと同調(シンクロナイズ)して子どもの援助に生かされること、それがまさに親が協力者となることにほかならない。そのような親は、カウンセラー／セラピストにとっては、共同治療者(co-therapist)ともみなされるべき存在である。

しかしながら、親はつねに優れた協力者であるわけではない。難しい問題に対処する際の親の力量あるいは親自身の抱える問題との関連もあって、子どもが必要としている働きかけをスムーズに行うことができない親も少なくない。中には、わざわざ子どもの足を引っ張るかのような対応をする親もいる。それも、必ずしも意図的にするのではなく、意識的には子どもの問題の解決を願っているながら、実質的にはそれを妨げる動きに出ることがまま起こるのである。

このような場合、親に求める最低限のこととしてカウンセラーが考えるべき点は、親が何がしかの意欲を持って来談し続けるそのことである。とりわけ、子どもが親と共に来談し、遊戯療法を受ける場合には、親こそが子どもの遊戯療法を保証してくれる存在なのである。優れた協力者ではなくても、せめて子どもを連れて来てくれるそのモチベーションを失わないようにしてもらうこと

が重要なのである。来談タイプの心理面接の場合、親が子どもを連れて来てくれることによって、はじめて子どもの遊戯療法が成り立つのである。親面接における最低限の、しかし最も重要な目標は、その点にあるといっても過言ではない。子どもを連れてくるモチベーションを失わない親は、そのこと自身で心理面接の協力者というべきなのである。その先にこそ、さまざまな可能性が子どもにもそして親自身にも、またカウンセラー／セラピストにも開かれると考えるべきであろう。

③親としていまできることは何か

子どもの問題が生じ、それを親の力だけでは解決に導けないとき、親は戸惑ったり、腹が立ったり、落胆したりする。心理相談の場を訪れること自体が、親としてのプライドをかなぐり捨てた非常事態なのである。不安と無力感に苛まされていることも少なくない。子育てのどこかで自分たちがとんでもない間違いをしたのではないかという、罪障感に傷ついていることもある。

親面接が目的とすることは、このような混乱状態から親を立ち直らせることである。そのためのきわめて効果的な方法は、親自身に子どもの問題解決の協力者となってもらうことにほかならない。

子どもの問題に親が何らかの影を落としていようといまいと、親は子どもの問題解決のために親として何かして上げられることがあるはずである。よい親であればいままら何もする必要はなく、問題の多い親だからあれもこれもしなければいけないというわけではないのである。たとえば、子どもが心理的退行を引き起こし、親がそれを理解して受け容れる必要があるときには、いままさに親が親として果たすべき役割を問われているのである。子どもが幼いときにじゅうぶんに愛情をかけ、

甘えさせたから、いまさら心理的退行を起こされる由縁はないなどというわけにはいかないのである。重要なことは、いま子どもが必要としていることに親が応えることができるかどうかなのである。

親面接の中で重視されるのは、これまでによい親であったかどうかではなく、親としていまできることをするかどうかなのである。そして、それをなしえたときには、親はささやかな自信を回復する。

筆者が親担当のカウンセラーとして以前会った母親は、7歳になる子どもの集団不適応を主訴に来談した。母親自身、自分の親との間に並々ならぬ問題を抱えていた。子どもは母親にとって理解しがたく、また受け容れにくい子どもであった。夫婦の関係も危なげであった。母親は半ば破れかぶれの状態で、自分にはどうすることもできないと、怒りと不安と無力感から、面接のたびに号泣した。それでも母親は子どもを連れて通い続けた。筆者は、いま子どもとの間で何かできることはないか、二人が安心して自然に、自由に過ごせる場や時間は持てないかと、かなり具体的な提案を行った。すべてを投げ出しかねない母親に、いま親として何かできることはないかと熱く問いかけたのである。筆者の働きかけは、受容的に母親の話聞くというものではなく、また母親が主体的に行動を起こすのを待つのではなく、そうとうにアクティブなものであった。むしろ、筆者の熱い思いが母親の潜在的な可能性に火をつけることを願っていたとすらいえる。何度か同じような面接が続くうちに、母親は面接中に泣かなくなった。その代わりに、面接で言われたことを実行しようとしたが、なかなか思うようにはいかなかったこと

が語られ始めた。そして、親として、いま子どもに何ができるのかを本気で考えるようになっていった。母親のその変化が、やがて事態を大きく展開させるきっかけとなったのである。

子どもの問題解決に向けた協力者としての役割を見出し、それを果たし、それなりの成果を得るとき、親は無力感から立ち直ることができる。親としての自信やプライドを回復する。親面接は、親が持つ協力者としての可能性を大切に扱い、それを育み、開くことを援助する場である。

3. 子どもの面接と親面接の力動的関係

①遊戯療法を守る役割としての親面接

子どもの遊戯療法の中で親面接が行われる治療構造の場合、親面接の最大の目的は、子どもの遊戯療法の進行を適切に守ることにあるといつてよい。遊戯療法は、遊びを媒介して子どもとセラピストが非現実的な世界を作り出すことをベースに進行するのであるが、ときとして外からの現実的な介入が生じる。

たとえば、子どもがセラピストと何をやっているのか、気になってたまらない親が、「どんな風な遊びをしているのですか？見せてもらえるかしら？」と質問をする。来談意欲が低くなった親から、「子どもの様子もあまり変わらないし、毎週でなくてもよいでしょうか？」と、中断の危険性をはらんだ要望が出される。また、学校の先生からカウンセラー／セラピストに、「学校ではひどく落ち着いていないんですが、そちらでの治療の進展はいかがでしょう。一度、今後の見通しについてお話を伺いたいと思いますが」と連絡が入る。

筆者は、こうした状況に適切に対応するのは、

親面接を担当するカウンセラーの役割であると考えている。遊戯療法の中では、子どももセラピストも遊びという非日常的な世界に没入する。そこでは、自我防衛が緩み、内的な感情や願望が剥き出しに近い形で表現されがちである。それは、子どもとセラピストの間のどこか秘密を共有するような深く密な信頼関係に基づくひじょうに特殊な状況であり、日常的な人間関係とは異なる性質のものである。このような遊戯療法の状況から見ると、前述の外からの介入が、子どもにとって致命的な侵襲性をもたらす危険があることは想像に難くないであろう。しかも、その危険は、子どもだけでなく、セラピストについても言えることである。たとえば、子どもを担当している役割上、セラピスト自身が学校の先生の前で子どもの状況について報告しなければならない事態に置かれるとき、セラピストはどのような報告をすればよいのか、大きな困惑を感じざるをえない。求められていることが、遊戯療法の面接状況とはあまりにも隔たりがあるからである。遊戯療法の中で扱われていることが、きわめて繊細で子どもの内的な傷つきやその癒し、あるいは子どもの中に芽生えつつある可能性などに関連しているのと比較して、外的な状況で取り扱われることは、現実的・具体的に、今すぐに効果が表れることを要求されたり、合理的な説明を求められたりすることが多いのである。そうとうの経験者でも、この二つの場面を違和感なしにこなすことは難しい。この事態は、セラピストにとってはまさに侵襲される体験に他ならない。

これに対して親面接は、はるかに現実的な視点に立つてものごとを取り扱っている。親担当のカウンセラーは、前述のような遊戯療法にとって危

険な外部からの介入が破壊的な作用をしないように、その防波堤となるべきなのである。具体的には、親や教師への説明を、親担当者こそが一手に引き受ける。また、親のモチベーションが下がったときには、親の苛立ちを受け止めつつ、子どもの面接の継続がいかにより必要であるかについて説明する、そうした役割と責務はすべて親担当者にかかってくるのである。

そうやってはじめて、子ども担当のセラピストは、子どもとの関係に集中することができる。このような防波堤の機能は、親面接に求められる本質的なものである。たまたまベテランの人が親面接を担当していたから、外からの干渉に手際よく対応をすることができたという問題ではないのである。親面接が遊戯療法の場を外の力から守ることによって、セラピストは子どもと安心して向き合う関係を作ることができる。それが遊戯療法の成功一失敗にとって重要な影響を与えることは、言うまでもないことであろう。

②遊戯療法について親に説明すること

外からの干渉に対して遊戯療法の場を「守る」という姿勢は、重要なことではあるが、やや消極的なニュアンスがないとも言えない。より前向きな表現をするならば、遊戯療法を「支える」ために、遊戯療法の場とその周囲にいる人たち(親自身もそこに含まれる)との関係を適切に扱うのが親面接の役割である、ということになろう。この問題については、卯月(2002)が、親面接が遊戯療法に対して「器として、背後から支える」機能を果たすことを論じている。その中で卯月は、「遊戯療法の中身を全て親に伝えればよいのではなく、……(中略)……ただ、親面接者は、遊戯療法から読み取れる治療仮説や意味を、できるだけ親に理

解しやすい形に翻訳して伝えることが必要である」と的確に指摘している。

実際、遊戯療法を支えるために、遊戯療法の意味について親に説明しなければならない事態がときどき生じるものである。たとえば、「遊ぶだけでよくなるんですか？」と親が素朴な疑問を抱いた場合などである。しかし、筆者は最近、もっと積極的な姿勢で親に対する説明を行う必要があるのではないかと考えている。すなわち、子どもに遊戯療法を行う理由やそこで期待できる効果についてそうとうにきちんとした説明を親に対して行うことが、単なる説明責任の問題としてではなく、親子の心理面接全体を効果的に進めるためには、必要になってくるのではないかと思うのである。親担当者は、遊戯療法に関する説明を親に何らかの形で行うのがふつうである。しかし、それは一通りの説明であることが多いのではないか。「遊びを用いる」ということが親には理解しにくいので、やむをえずすることであり、実際にはそれほど詳しい説明をしないことがほとんどであろう。実は、遊戯療法がなぜ効果があるのかについて、専門家ではない親や教師に説明することはなかなか難しいのである。また、遊戯療法によって具体的にもたらされる効果は様でないので、カウンセラー／セラピストとしても、あまり明確には述べたくない面もある。そうした微妙な困難さが、どちらかというとカウンセラー／セラピストに、遊戯療法の説明を控えさせてしまう傾向をもたらしているのではないか。「遊戯療法の意味は、分かる人には分かるから」という考えで、親にどう説明するかと言う問題を回避している傾向がなくもないように思われる。

以上が日本における一般的な状況であるが、欧

米ではやや事情が異なり、相談機関によっては、遊戯療法を開始する前に親に対して周到な説明を、ほとんど講義・研修のレベルで行うことがある。このことは、単にインフォームド・コンセントの問題ではなく、遊戯療法を軸とした子どもの問題解決に親がじゅうぶんな理解と認識をもって積極的に参加する事態をもたらすのである。日本においてどのようなやり方でこの問題を扱っていけばよいのか、まだ未知数のところはあるが、重要な可能性を秘めた問題であると思う。

③子どもの問題は事例全体の展開の調整弁

親面接の重要な役割は、子どもの遊戯療法を「守り」「支える」ことである。すなわち、カウンセラー／セラピストは、子どもの遊戯療法に焦点を置いて問題に取り組もうとする。もしそうだとすれば、親面接は補助的な役割しか持っていないのであろうか。親自身の抱える問題については、親面接の中で扱うべきではないのであろうか。筆者は、必ずしもそうではないと考えている。親こそが本当のクライアントであり、子どもが親を連れてやってきたと言った方がよいような事例にもしばしば出会う。と同時に筆者は、親面接のあり方は、つねに子どもの面接との関係で捉えられるべきであると考えている。

子どもの問題は多くの場合、親や家族の抱える問題のひとつの現れとして生じる（これは、後者が前者の原因であるといった短絡的な現象ではない）。そして、親が自分の問題あるいは自分たちの問題としてではなく、子どもの問題として心理面接の場に登場したこと自体が、一種の運命的な状況を示しているのである。このとき、親は子どものことが気になるがゆえに来談してくる。自分あるいは自分たちの問題を回避しているともいえる

し、親の業として、子どものことだけはさすがに心配なのでそれを何とかしたい思いでやってくるともいえるであろう。その先、自分たちの問題として引き受ける覚悟をするか、最後まで子どもの問題として回避し続けるかは、まさに親の選択に委ねられているのである。

子どもの問題を入場券として心理面接の場に現れた親が、最後まで子どもの問題の陰に隠れるとすれば、それは許されないことなのであるか。筆者は、この事態は、両刃の剣であると思っている。すなわち、親自身に解決すべき問題があるにもかかわらず、子どもに焦点が当たり続けることは、子どもの負担を大きくする危険性がある。そうすると、子どもはいつまでもIPの役割を続けなければならず、容易に健康な子どもとして自立できないかもしれない。それでは、できるだけ早々に親の問題に焦点を当てるべきなのかといえ、そこにはまた別の危険性がある。それは、およそ子どもよりも親の抱える問題の方が根が深く、ややこしいことが多いので、早々と親の問題を取り上げると、事例全体が混迷状態になり、けっきょく、子どもはその状態に巻き込まれて容易には自立できないかもしれないのである。そしてまた、親自身の問題に焦点化することは、親の抵抗を引き起こし、そもそも来談意欲を失ってしまう危険性もある。すでに述べたように、親が子どもの問題を解決しようと一生懸命に来談し続けることにこそ、希望の光があるのである。だとするならば、親の問題に焦点化することは、そうとうに慎重になるべきであろう。

親が自分の問題ではなく、子どもの問題を入場券として来談してくるものの運命的な状況とは、まさにそのような微妙な状態を表しているのではな

る。とすれば、子どもの問題を入場券としていることに敬意を表すべきであろう。要するに、子どもの問題は、事例全体が抱える問題の展開が破壊的にならないようにするための一種の調整弁として機能するのである。おそらく、一番無理のないやり方は、親の抱える問題にも気づきつつ、まずは子どもの問題の解決に向けて親に協力者として参加してもらい、やがて子どもの問題が峠を越えたときに、親自身の問題を扱う可能性・必然性を模索、検討する、ということであろう。

ところで、親の問題はそこに焦点を当てなければ扱えないものなのであるか。子どもの問題の陰に隠れることは、親の問題に蓋をしたまま、必要なことを何もしないことになるのだろうか。筆者は、必ずしもそうではないと考えている。すなわち、あくまでも子どもの問題に焦点化しても、また、親にはあくまでも協力者として何ができるかを考えてもらう親面接であっても、実はその過程で親の問題はそうとう濃厚に取り扱われるものなのである。親が意識的に、また覚悟を決めないかぎりには自分自身の問題に取り組むことができないかといえ、そうではないということである。

筆者（弘中、1988）が以前会ったある母親は、子どもの不登校を主訴として来談し、不登校にまつわる子どもと父親(夫)のぎくしゃくとした関係を心配することから始まって、自分と夫の関係、夫自身の母親体験、さらには自分と義母との奇妙な類似等について語った。それらはいずれも、きわめて複雑で根の深い問題を潜在させていた。しかし、母親がそれらについて語ったのは、あくまでも子どもの問題を理解し、子どもに適切な対応をするための模索の中で行われたことであり、自分自身の問題に取り組む覚悟に基づくものではな

かった。子どもの問題が解決し、いよいよ心理面接も終わりになるときに、筆者は、「この先、あなた自身の問題が残っていると思いますが」と思い切って投げかけてみた。すると母親は、「よく分かっています。でもそれを扱うのは止めておきます」と穏やかに答えたのであった。筆者は、この母親は、自分の問題に蓋をしたのではないと思っている。子どもの問題を扱う親面接の過程で、母親はそうとうに自分の問題に気づき、それを取り扱ってきたのである。実際、この事例でもっとも大きな内的な変容を見せたのは、母親自身であったのではないと思われる。

このように、子どもの問題を扱う中で、親はそうとうに多くの作業を行い、自分自身の問題とも直面し、変容の機会を得る。とすれば、子どもの問題を入場券として親子が現れたその運命的な状況を大切に扱うことは、ある種の必然性と合理性を備えていると考えるべきであろう。

4. 終わりに

子どもの問題、そしてそれを取り扱う遊戯療法は、つねに親面接とワンセットになっていると言える。原因と結果といった単純な関係ではなく、

子どもの問題と親の問題は深く入り組んでいる。両者を一対と捉えながら、事例全体が生かされる親面接のあり方をさらに模索することが、今後必要であろう。

文献

- 弘中正美 1988 ピーターパンの母親捜し
日本心理臨床学会編集委員会編 心理臨床ケース研究 5, 77-94. 誠信書房
- 弘中正美 1997 子どもの心理臨床の特殊性——親・家族の要因が及ぼす影響について——
千葉大学教育学部研究紀要 45, 31-37.
- 弘中正美 2003 遊戯療法 大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦監修 臨床心理学全書 9, 田嶋誠一編 臨床心理面接技法 2(所収) 誠信書房
- 弘中正美 2004 子育て支援における親面接
臨床心理学 4, 628-632. 金剛出版
- 卯月研次 2002 遊戯療法と親面接: 基本として求められていること 臨床心理学 2, 320-324. 金剛出版

Problems on the counseling for parent/parents

Masayoshi HIRONAKA

ABSTRACT

In psychotherapy for a child, the counseling for parent/parents is accompanied with necessarily. There are various types of parent/parents and the purposes of the counseling for them are different

by each type. Problems on the counseling for parent/parents that are discussed in this paper are as follows: (1) Parent/parents should not be investigated as a cause of child's problem. (2) Parent/parents have various levels of potential abilities as cooperators. (3) It is important to find something that parent/parents can do for their child. (4) The counseling for parent/parents can protect the play therapy for the child from outside intervention. (5) It is important to explain the effects of play therapy in the counseling for parent/parents. (6) The child's problem can function as a safety valve of problems of the whole case containing the child and parents.

Key Words: counseling for parent/parents, function as cooperators, function protecting the play therapy